

第670回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2025年2月度 ——

◇ 議題

<テレビドキュメンタリー>

「キセキの第九～佐渡裕と育徳館管弦楽部の6年～」

放送日：2024年12月31日(日)午前7時30分～9時00分

◇ その他

2025年2月17日(月)開催

九州朝日放送株式会社

第670回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2025年2月17日(月) 15時25分～16時50分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 8名

| | | |
|------|-----|-----|
| 委員長 | 上野 | 恵梨奈 |
| 副委員長 | 山根 | 久資 |
| 委員 | 副田 | 智幸 |
| 委員 | サーズ | 恵美子 |
| 委員 | 小柳 | 美佳 |
| 委員 | 森 | 慎二 |
| 委員 | 泗水 | 康信 |
| 委員 | 林田 | 真心子 |

欠席委員数 0名

放送事業者側出席者名

| | | |
|------------------|----|-----|
| 代表取締役社長 | 森 | 君夫 |
| 取締役 報道制作局長 | 大迫 | 順平 |
| 執行役員 総合編成局長 | 柴田 | 高宏 |
| 役員待遇 報道制作局 解説委員長 | 臼井 | 賢一郎 |

| | | |
|----------------|----|----|
| 番組審議会事務局長兼広報室長 | 吉岡 | 実 |
| 番組審議会事務局(広報室) | 松永 | 俊郎 |

4. 議題

- (1) テレビドキュメンタリー「キセキの第九～佐渡裕と育徳館管弦楽部の6年～」
放送日時：2024年12月31日(日)午前7時30分～9時00分
- (2) 2月・3月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (3) 1月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (4) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 生徒たちの情熱や焦り、涙、笑顔、それに全力で向き合う佐渡裕さんの姿勢、コロナ禍を経て実現した演奏に心を揺さぶられた。6年間という長期にわたって密着したからこそその素晴らしいドキュメンタリーだった。若いパワーの可能性を感じた。
- コロナ禍でコンサートが延期になったり、曲目を変更せざるを得なくなったり、その間、卒業していく人たちもいたりして、ドラマのような展開だったが、最後には数々の困難を乗り越えて「キセキの第九」を成功させてしまう、まさに全てが奇跡のストーリーだと思った。
- 生徒たちが悔し涙を流しながらも諦めずに必死で努力し、少しずつ自信をつけ成長していく姿は勇気と感動を与えてくれた。これを経験した生徒たちは、生きていくうえで本当に大事な一生の宝物を手に入れたのだろうと思った。
- コロナ禍でコンサートが開けなかったOBの思いや上手く演奏のできない生徒の思い、生徒を信じようとする先生、温かく指導する矢澤さんと佐渡さんの思いなど、様々な思いを深くしっかり表現することができていた。
- 佐渡さんの厳しい言葉やつらい判断に生徒たちが涙しながら、落ち込みながら、練習し、克服し、コンサートを成功させ、心の底から涙を流し、成長する姿を表現したこの映像は教育の原点を表す大事な記録になっていた。
- 最後の場面が演奏会を終えた管弦楽部の様子になっていたことから、「これからも育徳館管弦楽部は続いていく」という未来を感じさせて良かった。
- 2022年にラジオ番組「『約束』マエストロ佐渡裕と育徳館管弦楽部奇跡の4年」を審議した際「映像で見たい」と思ったが、その後を追いかけたテレビ番組を視聴できて感激した。
などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 世界的指揮者がどうして育徳館管弦楽部にひきつけられ指導するようになったのか、その理由や背景が知りたいと思った。
- 特に2つの楽器を演奏する生徒にフォーカスを当てる構成にした理由を教えて欲しい。
- 未成年の取材対象者たちとどのようにして信頼関係を構築したのか気になった。

- コンサートでは佐渡さんの映像が多かったのもう少し生徒を映し出してほしかった。
- コロナ禍が落とした影の部分も描いてほしかった。
- いつの映像なのか分かりづらい場面があった。撮影時期を示すテロップを長めに表示するなどしても良かった。
- ナレーションが入る場面に「取材 ナレーション 臼井賢一郎」という表示があると誰が取材をして語っているのかより分かりやすかったのではないか。
- 「第九」なので、年末に放送したことは理解できるが、もう少し視聴しやすい時間帯に放送できなかったのか。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、制作担当者からは、

- 取材のきっかけは系列局からの情報提供。別の講演で行橋市を訪れた佐渡さんを育徳館管弦楽部が演奏で出迎え、熱意ある演奏に心を打たれた佐渡さんが指導したことがきっかけ。
- 佐渡さんが指導し続ける理由について尋ねると「約束だから」「縁だから」と語られる。若者を指導しても一度きりのものが多く、それほど育徳館管弦楽部に魅了されたのだと思う。
- コロナ禍という大きな壁が立ちただけで、人間が生きる意味や人生に及ぼす影響について思い知らされた。取材者自身が学ぶ機会を得たのでテレビドキュメンタリー化した。
- ティンパニの小川さんは難しい楽器の演奏に葛藤している様子だったが、皆川先生は「(小川さんを) 変えるつもりはない」と答えたので「教育」との観点が強いと思い小川さんを追うことにした。ホルンの藤村さんは想定外の異変で番組の一つの軸になると確信した。
- 厳しい局面にあるティーンエイジャーへのインタビューに十分な配慮をしていたが、何度も顔を合わせ、いろいろな会話を交わしていたので、比較的どんなインタビューにも答えてくれた。取材者が自分をさらけ出して対峙したことで信頼関係は構築されていたと思う。
- 「コロナ禍が落とした影」を描写するには、5人のOBを登場させるだけで限界だった。特にティンパニを担当した現役の小川さんとOBの鈴木さんが非常に象徴的だったので、かなりの描写をしたつもりになっていたが、まだまだ不足感があったかもしれない。
- ナレーションについて、ティーンエイジャーの話なので、若いタレントさんやアナウンサーでもフィットしたと思うが、あらゆる場面を含めてずっと生徒たちの隣にいた。全部見てきたという思いがあって、自分で語りたいと思いナレーションに挑んだ。
- 90分番組を通常編成するのは難しく、年末年始編成として比較的長めの番組も編成しやすい時期に編成した。扱うテーマが「第九」というのもあり年末に放送したが、視聴率という点で十分な成果は残せなかった。

などの説明をしました。